

スペシャリストの素顔

医療現場ではさまざまな職種の職員が働いています。その中から、スペシャリストとして臨床心理士をご紹介します。

■臨床心理士



九州医療センター
辻 麻理子 さん
臨床心理士

今年9月に公認心理師法が施行され、来年実施予定の国家試験により国家資格「公認心理師」が初めて誕生予定。心理面で患者をサポートし、箱庭療法や臨床動作法など、あらゆる方法で患者に寄り添う。



辻さんなど全国のNHOスタッフが次世代の心理職や公認心理師を目指す人のためにまとめた書籍『病院で働く心理職—現場から伝えたいこと』(日本評論社)

関わることの多い病気は？

九州医療センターは、統括診療部長のもとに心理療法士室があるので、あらゆる病気に関わっています。名前に“心理”がつくので精神科領域の病気だけをサポートするイメージがあるかもしれませんが、どんな病気でもストレスを感じない人はいません。必要であれば、どの診療科とも関わります。



とはいえ、特に心のサポートが必要な病気の患者さんへの対応が多いのは事実です。国立病院機構として重点的に取り組

んでいるがんや精神疾患、セーフティネット医療のエイズがその一例ですが、最近では肥満の患者さんなどにも幅広く関わっています。

臨床心理士の役割は？

面接や検査によりアセスメントした情報を、担当スタッフと常に情報共有することです。

例えば、認知症では高次脳機能検査の結果を、HIV 感染症/エイズであれば、それに加え気分の変化の検査結果を、研究の知見、患者さんのご様子や日常生活の情報と合わせて専門的に検討したうえで伝えます。これらの情報は、患者さんの治療に密接に結びついているため、チームの多職種が専門的に対処する時に有益な情報となり、結果として患者さんへの最適な医療につながります。



一方で、患者さんの不安をいかに軽くできるかにも注意しています。認知症なら早期診断、糖尿病なら血糖コントロールの意義や大切さについて、患者さんの立場や心情を共有しながら治療環境の調整や取り組みを話し合います。HIV 感染症/エイズは内服治療が可能な病気となりましたが、HIV 感染を知った患者さんのショックを解消できる薬はありません。継続的に心の問題に寄り添うこと、それは私たちの出番であり、チームのメンバーとしての役割です。

患者さんに対するモットーは？

どんな病気であっても、それを伝えられることは大なり小なりショックを伴います。そのため、病気によって一時的に分断された患者さんの過去、現在、未来を再びつなげられるよう心掛けています。私たちには病気の診断や薬の処方ではできませんが、その人の個性や特性を尊重し、患者さんご自身の力で元気になっていく、専門性を生かした心理支援は可能です。

結局のところ、患者さんが「自分ができること」や「自分を認めること」が可能となり、それが医療から生活の場へ水の波紋のように広がるための、“黒衣”になることが務めだと思っています。人には個性があるように、心理支援の方法も多様です。だからこそ、私たちは日々心理支援の技術を磨き、臨床研究に取り組み、患者さんの希望や社会の動向を踏まえながら、その実践に努めています。その人に合った最適な方法を常に探求しながら、これからも患者さんやチームとともに歩んでいきたいですね。